

平成二十三年十月一日

東京 de 寺子屋 (第五十回)

## 吉田松陰とステイヴンソン

寺子屋モデル 廣木 寧

### 一、吉田松陰 略年譜

- 天保元年 (一八三〇) 萩郊外松本村に父杉百合之助、母滝の次男として生まる。
- 天保六年 (一八三五) 叔父吉田大助歿し、その跡を嗣ぐ。吉田家は山鹿流兵学の師範たり。
- 天保十年 (一八三九) 初めて藩学明倫館にて家学を教授す。
- 天保十一年 (一八四〇) 藩主毛利敬親の親試あり、武教全書を講ず。藩主、その巧妙なるに驚く。
- 嘉永三年 (一八五〇) 九州遊学の途に上る。
- 嘉永四年 (一八五一) 藩主の駕に従ひて江戸に行く。
- 嘉永五年 (一八五二) 関所通行のための過書手形を藩に貰へぬうちに宮部鼎蔵、江幡五郎と東北遊の旅に上る。亡命の罪を以て土籍を削られ、実父百合之助の育となる。
- 嘉永六年 (一八五三) 五月二十四日江戸に入る。(六月三日、米艦浦賀に来たる。十二日去る。)
- 安政元年 (一八五四) (一月十四日米艦浦賀に再入港す。) 三月二十八日午前二時頃、下田にて米艦に上りて海外出遊を乞ふも許されず。幕府に自首す。九月幕府は海外渡航の罪を断じ長州藩に幽閉を命ず。二十三日江戸を発し、十月二十四日萩野山獄につながる。
- 安政二年 (一八五五) 四月十二日獄にて孟子を講じ始める。十二月十五日実家に預けらる。
- 安政四年 (一八五七) 十一月、杉家の宅地内に松下村塾舎を建つ。
- 安政五年 (一八五八) 三月、松下村塾増築なる。十一月、同志と血盟して老中間部詮勝を要撃せんことを謀る。藩は大いに憂慮して家に厳囚を命ず。
- 安政六年 (一八五九) 四月十九日幕府、江戸の毛利藩邸に松陰の東送を命ず。五月二十五日檻輿萩を發す。六月二十四日江戸に着く。七月九日幕吏の取調を受け伝馬町の獄に下る。十月二十七日正午頃獄内にて死罪に伏す。

### 二、アルフレッド・ユーイングの回想 (よしだみどり著「知られざる『吉田松陰伝』」より)

私にとって、ルイスとの思い出は、最後に彼に会った一八七八年のある夏の思い出である。それは、ジェンキ  
ンが私とルイスを、東京大学の教授となる人物を探し求めてエディンバラにやってきた日本の官吏、マサキ・タ  
イソウ(正木退蔵)氏に会わせるために夕食に招待してくれた時で、マサキ氏が私に白羽の矢を立てた時のこと  
である。

マサキ氏は私たちに、日本の革新時代の初期の英雄、ヨシダ・トラジロウの話をした。

それは愛国と冒険、苦闘の連続と、希望と挫折の物語であった。

ルイスは深く感動した。

彼は、その話を書き留め、後にマサキ氏に補足してもらい、ついにルイスしか書けなかった物語を書き残した。

その中で、彼は牢獄の中で若いヨシダがまもなく処刑されるといふ時に、この古典の詩の言葉を聞いて、いか

に勇気づけられたかを語っている。

大丈夫寧ろ玉となりて砕くべし  
瓦となりて全うすること能ず

この言葉が、ステイーヴンスンを魅惑して、彼のモットーになり、彼自身の短い生涯をもたらしたのではなからうか。

### 三、『留魂録』（安政六年十月二十六日）

讚の高松の藩士長谷川宗右衛門、年来主君を諫め、宗藩水家と親睦の事に付きて苦心せし人なり、東奥揚屋にあり。其の子速水、余と西奥に同居す。此の父子の罪科何如未だ知るべからず。同志の諸友切に記念せよ。予初めて長谷川翁を一見せしとき、獄吏左右に林立す、法、隻語を交ふることを得ず。翁独語するものの如くして曰く、「寧ろ玉となりて砕くるとも、瓦となりて全かるなかれ」と。吾れ甚だ其の意に感ず。同志其れ之れを察せよ。

### 四、ロバート・ルイス・ステイーヴンスン著 「ヨシダ・トラジロウ」

この頁の冒頭に掲げた人名は、おそらくイギリスの読者の知っている名ではなからう。しかし、その名は、ガリバルディやジョン・ブラウンの名と同じように、人口に膾炙されている名前になるべきだと思っている。いつの日にか、遠からずして、吉田の生涯の詳しい記述や、彼が日本の変革に及ぼした影響の程度については、さらに詳細なことが聞けるものと期待してよからう。

彼（松陰）が現状に不満を抱いていたことは、改革という目的に没頭した彼の熱烈さが如実に物語っている。他人ならば落胆したようなことでも、そのためにかえって、吉田は仕事に対し情熱をかきたてたのだ。兵学を講じたとき彼の心を占めていたのは、第一に日本の防衛であった。日本の対外的な弱さは、跋扈する夷人の態度や巨大な夷敵の軍艦の来訪をみれば明白なことであった。日本は包囲された国であった。

おそらく彼は、他国の悪い所を除いて長所を取り入れ、夷人の知識によって日本に利するところがあるようにし、しかも、自国の学術や美德が、他国から犯されないようにと念願したのであろう。しかし、彼の願望の本質が正確にはどうであろうと、それを達成する手段は、困難でもあり、また、明白でもあった。誰か眼識と理解力を備えた人が、役人の監視線を突破して新世界へ脱出し、その地においてこの異文明の研究をしなければならぬ。そして、誰が吉田よりもこの仕事に適材であり得たであろうか。その仕事は危険を伴わないわけではなかったが、彼は恐れなかった。

彼は、企てた独自の計画には、いずれも失敗したけれども、全体として見た場合、彼の成功がいかに完璧なも

のであるかを知るには、彼の国を見さえすればよい。

これは英雄的な一個人の話であるとともに、ある英雄的な一国民の話だということを見損じないでほしい。

宇宙の比率からすれば、わずか数マイル離れた所で、私が日々の課業を怠っている間に、吉田は眠気を覚まそうと自ら蚊にさされ、自分を責めさいなんでいたのだ。そして、読者が一文の所得税を惜しんでいる間に、日下部は高潔な詩文を朗誦して、死に向かって歩を進めていたのである。

## 五、漢詩

象山先生送別の韻に歩して却呈す 二首

東方有俊傑

東方に俊傑あり、

志尚素不群

ししようもぐん  
志尚素と群ならず。

常慕非常功

常に非常の功を慕ひ、

又愛非常人

又非常の人を愛す。

吾誤辱知愛

吾れ誤つて知愛を辱うせるも、

不知其所因

其の因るところを知らず。

一別山河邈

一別、山河邈たり、

情懷訴九旻

情懷、九旻に訴ふるのみ。

踽々涼々者

踽々涼々たる者、

子立有誰隣

けつりつ  
子立す誰れあつてか隣せん。

絶海千萬国

海を絶つ千万の国、

何以得新聞

何を以て新聞を得ん。

国家方多事

国家まさに多事、

吾生非不辰

吾が生るるや辰ならざるに非ず。

涓埃有益国

けんあい  
涓埃、国を益することあらば、

敢望身後賓

けん  
敢へて身後の賓を望まんや。

形軒與彩籠

とうけん さいろう  
形軒と彩籠と、

鸞鶴各為群

らんかく な  
鸞鶴各々群を為す。

中有野鳥在

中に野鳥の在るあり、

嗶嗶語喧人

しょうしょう  
嗶々たる語人に喧し。

(後略)

## 六、「回顧録」

(三月) 九日 晴。朝、永鳥を旅宿に留め、洪生と金川に至り、吉村一郎を訪ひ、象山の書を達す。一郎交代して、浦賀に帰らんとす、故に鯛屋三郎兵衛に事を託して去る。鯛屋に往きて問ふに、今日は薪水積入の船なし、明日を待つべしと云ふ。此の日、夷人横浜に上るを聞き、走りて之れに趨く。便に因りて書を付せんと欲す、至れば則ち夷人已に去る。洪生歎息泣かんと欲して云はく、「天吾が事を成すことを欲せざるか、何ぞ其の事々齟齬して此に至るや」。 (中略) 沙浜を徘徊するに、二小舟あり、但だ櫓なし。遍く漁家を視るに、一小空屋中櫓数挺あるを見る、二人大いに喜び云はく、「事成れり」と。急に保土谷の旅舎に返る。是れより先き吾が輩夜を以て来り、夜を以て去り、蹤跡詭秘なるを以て旅舎頗る疑を生ず。是の夜江戸に帰るを以て名とし、晡時旅舎を出で、途中小提灯一把を買ふ。金川台に至り酒樓に登り、故らに酣宴し、子夜に至り又横浜に至る。昼日見る所の二小舟は漁人已に乗りて去る。且つ天色暗黒、風氣特に悪し、海波山の如し、昼日の算悉く違ふ。大いに歎じて曰く、「江を渡るの舵なき、吾れ將た如何せん」と。是の時、村犬群り来り吾れを吠ゆ。余咲つて洪生に謂ひて曰く、「吾れ初めて盗の難きを知る」と。是の夜、吾が輩已に策を決して此に来る、而して事正に此の如し、計出でん所を知らず。遂に又保土谷に至る。至る頃に天雨ふり夜明く。又旧旅舎に投ず。旅舎益々疑ふ。永鳥依然として在り、曰く、「二君の計又違ふか」。余咲つて曰く、「計愈々違ひて志愈々堅し。天の我れを試むる、我れ亦何をか憂へん」と。洪生怒憤面に満つ。

## 七、書簡(安政六年四月七日 北山安世宛)

(前略) 独立不羈三千年來の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレ―ヘッド(註 オランダ語で自由の意味)を唱へねば腹悶医し難し。僕固より其の成すべからざるは知れども、昨年以來微力相應に粉骨碎身すれど一も裨益なし。徒らに岸獄に坐するを得るのみ。此の余の処置妄言すれば則ち族せられんなれども、今の幕府も諸侯も最早醉人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼みなし。